帰国子女の言語習得・喪失過程に関する研究

伊藤・石黒・上條

この研究グループは帰国子女が習得した外国語を維持し伸ばすために、1989年から3年間、横浜市研究助成金により「帰国子女の言語習得・喪失過程」に関する研究を行なった。横浜市教育委員会の協力で、横浜市内の公立小・中学校の帰国子女に基礎調査表を配布した。回収したデータ及び基礎調査表の回答者25人の研究授業を基に研究を行なった。

研究の第一段階として、共同研究者3人は各自それぞれの研究分野を中心に研究した。

上條は考案した言語習得要因モデルを用いて、海外子女の外国語の学習期間と外国語を習得する能力との相互関係を考察し、子女の外国語習得、維持、喪失に要する期間それぞれの平均率を提示した。現在、言語習得要因の相対関係と帰国子女のバイリンガリズム（習得した外国語と日本語の習得との関係）の研究をしている。

石黒は帰国子女の外国語と日本語の使用環境とこれら二言語のコード・スウィッチングに焦点を当てた。帰国子女の外国語使用は話す相手（外国人、帰国子女、兄弟同志の順序）により減少すること、更に子女の二言語コード・スウィッチングの頻度は外国語のみを使用する頻度より多く、コード・スウィッチングに関して日本語の文章に外国語の語句を挿入する頻度のほうが二言語の文章をスウィッチする頻度より多いことを明確にした。帰国子女の二言語交渉の特徴と二言語習得・維持との関連について研究を続行している。

伊藤は幼児の言語習得に関する心理言語学的考察の見地から、外国語習得の初段階において決まり文句が現地の子供とのコミュニケーション及び現地の生活・習慣の適応に効果的であることを確証した。海外・帰国子女のために、決まり文句集の作成及び海外経験の生かし方について研究を続行している。